一仏教僧のウクライナ体験

ポストソ連世界を行脚してきた遊行僧の祈りの視点から

寺沢潤世

本日の宗教対話の会議にお招きいただきました日本山妙法寺の寺沢潤世です。今話をしているところは、戦争の渦中にある、ウクライナの西のカルパティア山脈山中に準備した道場からご挨拶させていただいています。今、ウクライナの戦争はロシアの侵攻による国家危急存亡に直面し、既に一年以上抵抗し続けて今日に至っています。ウクライナの戦争が今後どういう形で終結するのか、まだ予断を許しません。今の時期はその最も重大な山場にさしかかっていると思います。この戦争がどういうかたちで終結しうるかという問題は、即これからの人類の未来の運命を決する、瀬戸際にあると言っても過言ではありません。私どもは五年以上前に、この深い山中に、ウクライナとヨーロッパの平和を祈る道場を準備いたしました。既に五年前、ウクライナの危機は、国家の存亡の軍事的な侵攻の危機を迎えうる可能性がありました。国においての存亡の危機は、自然災害や諸々の災害のほかに、古来の宗旨では、「自界叛逆難」、もう一つは「他国侵逼難」という戦争、これが国家の存亡に関わる最大の難だと捉えています。ウクライナがそういう大難に直面することを事前に憂い、この山中に道場を構えました。我々の宗旨である「立正安国」という平和の法華経の祈りをもって、国土全体の平和と安穏を祈るという目的で、この道場を準備致しました。昨年、戦争が

始まる以前からウクライナに入り、戦争回避の祈りをキエフで務めると共に、ロシア軍の侵略が開始されたその時点で、私たちはこの山中に場所を移して、今日に至るまで平和の祈りを続けています。

私がウクライナに入ったのは、まだソ連時代のことでした。最初に入ったのはモスクワです。当時一九八八年、ソ連のゴルバチョフ大統領とアメリカのレーガン大統領が、モスクワにて米ソ首脳会談を開催するその時期に合わせ、私は初めてモスクワ入りを果たしました。ソ連の歴史上初めて赤の広場にて、日本の唐招提寺に伝来された鑑真和上が招来されたお仏舎利の一部を、当時の唐招提寺、森本孝順長老猊下からお預かりして、世界巡礼の行脚に旅立ち、モスクワに入りました。そしてソ連の共産党本部の特別の正式な許可を頂いて、クレムリン宮殿の前、赤の広場にそのお仏舎利をお祀りして、レーガン・ゴルバチョフ首脳会談の真っ最中、お祈りを務めました。それはソ連が始まって以来、初めて正式に宗教者として、赤の広場で平和の祈りをすることが許されるきっかけになりました。それ以降、冷戦終結、ソ連崩壊、その後の大混乱の中で、これからの世界はどうあるべきかというビジョンは、真摯に追求されることなく、世界の国際秩序のあり方の根幹を揺るがす大事件が立て続けに起きていきました。そのなかで、一つ一つ大きなきっかけが誤った方向にのみ決断されていきました。そのなかで冷戦終結後の今日、ウクライナの戦争によって、人類は最も大きな岐路に立ちかかっていると言っても過言ではありません。すなわち冷戦終結後の世界、ソ連崩壊後の新しい国づくり、そしてその間、湾岸戦争、チェチェン戦争、9/11 後のテロに対する戦争。さらにイラクの第一次イラク戦争、さらにテロを撲滅する戦争という名のもとでロシアにおいては第二次のチェチェン戦争、その後、アラブの春と言われる変革運動は、ことごとく軍事力によって押さえ込まれてきました。そして今日のウクライナ戦争に至ったわけです。当時初めてソ連入りした頃、ゴルバチョフ大統領が冷戦終結に至るために、どういう理念と時

代精神のもとで、誰もが予想できなかった政治変革を実行していったのかを、今日もう一度振り返る必要があります。

私はソ連に入る前、一九七〇年代からヨーロッパで修行を務めていました。一九七〇、一九八〇、一九九〇年代、私がヨーロッパに入った当時は、冷戦の最高潮の時代で、新しい核ミサイルを東西ヨーロッパが配備するという緊張感のもとで、核戦争の危機が叫ばれていました。当時のヨーロッパでは、一時停滞していた反核・反戦・非暴力の一般市民の平和運動が大きく盛り上がっていた時期でした。私事で恐縮ですが、思い浮かべるのは、初めて一九七五年私が二五歳の時にイギリスに入った頃の平和運動の行くえです。当時無一文、乞食同様の生活をしながら、ロンドンで修行を務めていました。最初の拠点が北ロンドンのハイゲート・セメトリーという古い墓場の近くです。そのハイゲート・セメトリーという墓場の中にカール・マルクスのお墓があります。そのカール・マルクスのお墓のすぐ近くに、小さな草庵を準備して、イギリス、ヨーロッパの平和を祈る行脚を続けました。

イギリスで行進を始めた時、当時のイギリスの多様な宗教、教会の方々が一緒になって行進をいたしました。そういう積み重ねの中で、やがて大きな国民的な非暴力平和運動として、イギリスのみならず全欧州に展開されました。その運動はあらゆる宗教者、キリスト教の様々な教会が、何のわだかまりもなく、クエーカー、カトリック、メソジスト、英国国教会の方々も一緒になって、ヨーロッパが核戦争の危機を回避して、東西分断のヨーロッパの壁を乗り越えて、核戦争の危機を人類から取り除いていこうという確固とした理念のもとでおこないました。非暴力の行動による、抵抗運動、直接行動、平和行進、大集会が展開されました。その大きなうねりというものが、最終的に東ヨーロッパの共産圏の市民の人たちにも動かし、東ヨーロッパの共産圏の国々の教会、市民が立ち上がっていく。そういう形で最後は、非暴力の市民の力で、一国一国が自らの未来と運命を、その国の人々が決定していくということにな

りました。そういう方針を大きく取り込んだのがソ連のゴルバチョフ大統領でありました。

その時代精神というものが、ついに非暴力によってベルリンの壁を崩壊させ、非暴力によって共産国東ヨーロッパの国々が、自分たちの国のあり方を、自分たちの国の将来を自ら決定していく。ソ連のゴルバチョフ大統領は、軍事力を動かさないで、それぞれの国の民衆が立ち上がった中で起きた国家変革の運動を、そのまま認めていきました。そこに二〇世紀の後半において、誰もが予想できなかったベルリンの壁の崩壊、東ヨーロッパ共産国家の解放、さらに東西ドイツの統一、さらにワルシャワ軍事同盟の解消、そして東西ヨーロッパの融合という大きな世界変革の潮流が生まれていったわけであります。

私はベルリンの壁が崩壊する七年前一九八三年において、まだ冷戦対決が最高潮の時に、一人でポーランドに入り、ワルシャワからベルリンの壁まで行脚したことがあります。その目的はその行路が示すように、分断のヨーロッパの壁を乗り越えていく、冷戦構造の根幹を変えていくお祈りを、ポーランドから始めました。たった一人の日本の僧です。何の準備もなく、ワルシャワから、てくてくベルリンに向けて歩き始めました。そうしたところ、小さな村でも、大きな町でも、その村のその町の教会が、扉を開けて私を受け入れてくれました。各地にある神学校の神学生たちが大歓迎をして、私のために集会を開いてくれてくれました。その場で一宿一飯のお慈悲を賜り、ポーランドの人たちの暖かい支援のもとで、全行程をベルリンの壁まで行脚することができました。

当時のポーランドは戒厳令の下で、当時有名なワレサさんの率いるソルダルノッシュ Solidarność 連帯という組合の運動が禁止されて地下に潜行している緊張の時期でした。その中で私一人、言葉も分からずに歩いていました。田舎の町々の教会の扉を叩いて、本当に心から歓迎と支援をいただき、ベルリンの壁にまでいたりました。その時に東ヨーロッパ、特にポーランドの体験を通じて、イデオロ

ギーも宗教・宗派も超えたところで、人類が核の戦争から生き延びる祈りは、万人の祈りとなって通じていったことを、自ら体験しました。それは私一人のささやかな体験ですが、その力こそがベルリンの壁を崩壊させ、東ヨーロッパの共産・独裁の国家を、民衆自らがその国を作り替えていく原動力の本質となったと思います。

もう一つ私の個人的な体験ですが、イギリスに初めて入って五年後、ヨーロッパ、イギリスの平和運動の人たちと一緒になって、イギリス、ヨーロッパで初めて、世界平和を祈るお仏舎利塔が完成しました。それはイギリスのミルトン・ケインズという新しい新都市計画の画竜点睛と言いますか、最後の仕上げとして、日本から来た仏教の平和のシンボルとしてのお仏舎利塔を新都市の目玉の計画として正式に採用され完成されたという経緯があります。詳しいことは申し上げませんが、その落慶法要がございます。当時、その初めて建立されたお仏舎利塔の落慶法要に、イギリスのありとあらゆる宗教・宗派が集まりました。英国国教会を始め、メソジスト、クエーカー、それからそういう各教会を背景とする様々な平和運動の流れがございます。パックス・クリスティ、ピースブリッジ・ミレニオンの方々のみならず、当時ヨーロッパに伝わってきたハリークリシュナやシーク教徒、それからバハイ教徒、回教徒、ゾロアスター教徒がみんな一同に集まりました。同時にヨーロッパからアメリカに移住していって今日のアメリカが作り上げられていったその時に、迫害され続けていった、当時のネイティブアメリカンの十部族の代表の方々も、初めてのヨーロッパの仏舎利塔に、アメリカから参席して、お仏舎利塔の前でネイティブアメリカンのピースパイプのお祈り、平和のお祈りを、涙を流しながら祈ってくださいました。

これは当時、近代国家日本が明治維新以来、イギリス、ヨーロッパから近代国家の経営を学びとるとともに、第二次大戦では日英は敵対する戦争の中にありました。そしてたくさんの英国軍の捕虜が日本軍によって虐待されたとい

う歴史は、イギリスの中では忘れられないものとして記憶されています。その中で、日本の、そして他宗教の仏教の、私たちの祈りをそのまま彼らの祈りとして賛同する全イギリスの宗教界があります。そして共に人類絶滅の核戦争を、冷戦を乗り越えていこうという私たちの祈りが、みんなの祈りとなって共感され、ヨーロッパで初のお仏舎利塔の祝いが務められました。それは本当の意味での東西文明の和解であり、融合の姿ではなかったか。ヨーロッパ白人文明によって迫害されたアメリカ原住民のネイティブアメリカンの人たちが、ヨーロッパで平和のために、アメリカからわざわざ来て伝統的なネイティブアメリカンの平和の祈りを捧げてくれました。それもまたヨーロッパ文明のアメリカにおける原罪というものが贖罪され和解されて、新しい全人類が一つの平和の祈りを作ろうとする発端の姿がヨーロッパの中で実現したのではないか、今にして私はその思いを深くするわけです。

そういう流れの中で冷戦終結があり、ベルリンの壁の崩壊があり、ヨーロッパの融合があったという、その不思議な一般民衆の非暴力の平和の祈りというものの力は、最後、ソ連のモスクワにまで到達するわけです。初めてモスクワに入りまして、米ソ首脳会談の最中、赤の広場で正式な許可を得て平和のお祈りをし、クレムリンからお招きを受けました。当時のゴルバチョフ大統領へ、唐招提寺からお預かりした鑑真和上由来のお仏舎利を、大統領の手に直々お渡し、新しい理念の世界創造の試みが成就できる祈りを、ゴルバチョフ氏にお届けする機会をいただきました。最終的にはその鑑真和上のお仏舎利は、そのままベルリンの壁にも行き、東西ドイツ分断、人類に初めて原爆を投下するトルーマンの決定をしたポツダム会談の会場にもそのお仏舎利を迎えて、最終的にはニューヨークの国連軍縮特別総会の会場にこのお仏舎利をご安置することができました。

それが一九八八年ほとんど期を同じくしてヨーロッパの大変革があったと同時に、一九九一年一月一五日に湾岸戦争が勃発いたしました。それはサダム・フセイン大統領が

クウェートに軍事侵攻したことに対する国際社会の、これは懲罰という軍事行動でありました。その時から世界変革のために一人一人の市民が、自らの運命を選んで新しい世界変革と創造の根幹に非戦・非武装・非暴力という新しい価値観によって、全人類が統合されようとしていました。その矢先に起きた湾岸戦争が、この大きな可能性をハイジャックする形で、方向性が間違ったのではないかと今にして思います。その湾岸戦争の中、バグダッドに私はとどまって、湾岸戦争が軍事力行使ではない形で、このイラクのクエート侵攻を解決していく手段を模索しようとしていました。

そのイラクの活動の帰路、モスクワにたまたま入った八月のことです。ゴルバチョフ大統領がクリミアで幽閉されてクーデターが勃発します。その中で私はモスクワで市民とともに、モスクワの街全体が軍と戦車によって包囲されている中、ロシア国会議事堂、通称ホワイトハウスに一般市民が籠城してバリケードが築かれていました。そこにたくさんの戦車が一触即発でそのバリケードを撤去しようとしていました。その渦中に私もバリケードに行って、モスクワの人たちと一緒に、私の平和のお祈りを続けておりました。ついに三日目にして、ソ連の軍がモスクワの市民の方につきました。そして武力行使なく、そのクーデターは失敗に終わったのです。この時、ソ連のモスクワで一九九一年八月、一般市民の非暴力・不服従・市民抵抗の力によってクーデターが失敗に終わったわけです。その年の十二月、ゴルバチョフ大統領はソビエト連邦の消滅を宣言しました。その大激動の渦中の中を、私みずからその場に居合わせて祈りを捧げていました。大きな激動のその現場の中で私はヨーロッパに、バグダッドに、ベルリンに、モスクワにおいて、祈りを続けてきました。

今現在三〇年を過ぎた今日、世界は冷戦後、ソ連崩壊後の新しい国づくり・社会づくりを失敗した現実のなかで、今ウクライナの戦争の渦中にあります。世界はかつてない形での最も大いなる危機と言ってもいいでしょう。三〇年

間ソ連崩壊後、私は旧ソ連圏を今日まで歩んでいます。チェチェン戦争も体験しました。コーカサス、中央アジアの国々も巡ってまいりました。その中で言えることは、プーチン大統領が今日まで進めてきた、ウクライナに軍事侵攻していくその過程というものは、来るべくして来た世界的な危機を今日もたらしたと見ています。真実というものを否定していく過程、その結果が今日のロシアとロシア社会の国のありようだと見ています。そして、ウクライナの国の独立そのもの、ウクライナの人たちが新しい民主的な国というものを作るために、ウクライナだけではない旧ソ連圏の全ての国々、全ての市民が直面し試行錯誤し、いろんな危機を乗り越えながら今日まで来ました。ウクライナに軍事侵攻したプーチン大統領の歴史観・世界観、それを大きく支援していくソ連崩壊後の今日のロシア社会の共同意識のありようというものが作られていく過程において、最大の悲劇は真実を常に否定し続けてきた、その結果が今日のウクライナに対するロシアの軍事行動だと思います。

そしてその軍事行動は引き続きヨーロッパ社会、それから全人類の存続の願いを人質にして、ウクライナ国そのものを否定する軍事行動、これは絶対に認めてはいけない一線を超えています。極論すれば、サダム・フセインがクウェートに侵攻したときに全国際社会が国連決議のもとに軍事行動を起こし、制裁を起こしました。私はそれを大きな間違いだと見ていますが、それはそういう形でイラクに対する軍事行動があったわけです。ロシアが今ウクライナにやっている軍事行動は、ウクライナそのものの民族自決・独立・領土保全、その全てを武力行使によって否定しています。それは国際社会全体の根幹の基本的な国連憲章・国際法の全てを踏みにじって行われたわけです。なぜ国際社会はイラクで軍事行動を起こしたように、このロシアの軍事行動を止めることができないのでしょうか。ウクライナの国は自分たちの国家の生存をかけてやむを得ず戦い続けていますが、ウクライナの国の今のあり様を私はチェチェンでも見ました。どのような形でチェチェンの村々、町々

が一つ一つ殲滅され、一般人が虐殺され、しらみつぶしに焼け野原になっていったわけです。その時に国際社会はそれを許容して受け入れてしまったわけです。その方法をプーチンはどこの国でもやっております。そしてウクライナの国そのものの存在を破壊させようとしております。

かつて第二次世界大戦を引き起こしたヒットラーの進軍を、どの一国が止めることができたでしょうか。オーストリア、ハンガリー、チョコスロバキア、オランダ、フランス、どの国も一国でヒットラーのファシズムの思想・軍事行動を止めることはできませんでした。それを止めることができたのは世界的団結によってヒットラーを止めることができました。もしそういうやり方でいけば、ウクライナに侵攻したプーチンのロシアをどうしてウクライナ一国で止めることができるでしょうか。もしウクライナが止めることができない時には、ウクライナの全滅を世界は受け入れるのでしょうか。核戦争という最後の手段というものによって全人類が人質にされた時には、あらゆる国際犯罪・戦争犯罪はやむなく認められていくのでしょうか。今、本質的に我々に問われているのはこの問題だと思います。ここで非武装は有効なのでしょうか。ここで非暴力は有効なのでしょうか。これからの世界において武力を行使することを否定するという国際秩序の根幹を今、人類は放棄するのでしょうか。日本の第二次大戦後の国是として、不戦・非武装ということが最も大切な国家理念の根幹となっています。それは全人類社会が第二次大戦後、完全軍縮、武力不行使という非戦の理念の下で、全人類の世界平和の根幹を築こうとする最も大切な理念がそこにありました。冷戦終結・ソ連崩壊という激動を、プーチン大統領は二〇世紀最大の地政学的なカタストロフィーだと捉えます。しかしそれを成し遂げたゴルバチョフ氏の時代精神と理念は、武力を行使しないで新しい不戦・非暴力・非核世界を築く、この冷戦終結とソ連消滅の根幹としての時代を作っていく理念であり精神でありました。

今多くの人は覚えていないかもしれませんが、ゴルバチ

ョフ大統領がニューデリーを訪問して、当時のインドの首相であったラジーヴ・ガンディー首相と共に一つの文書に署名しました。それはニューデリー宣言という文書です。そのニューデリー宣言のタイトルは、「非核・非暴力世界の未来に向けて」です。非核・非暴力世界を実現しようという時代精神と理念のもとで、冷戦終結とソ連の平和裏の消滅があった。プーチン大統領はそれを全否定した上で、どういう世界を目指そうとしているのか。今日までのプーチン治世の全ては、武力行使の肯定のもとで、ソ連崩壊後今日までのロシアのあり様は真実を否定していった。その嘘の虚構のもとで、武力行使をことごとく肯定していった総決算が今日のロシアの現実に他なりません。今宗教者はこの危機に対してどのように対応すべきでしょうか。今宗教者があらゆるイデオロギーを、宗教の教義、ドグマを超えて、全人類万人が生き延びていくための根底として武力行使を否定して不戦・非戦・非暴力を貫く。その上で人類を全滅していく国家権力が持っている核の武力というものをどう否定し削減して、非核世界を実現していくのか、もう一度、ゴルバチョフ大統領とインドのラジーヴ首相が宣言した「非核・非暴力世界」という理念を取り戻すことが、ウクライナの危機から全人類を救っていく第一歩だと思います。それを先ず世界の宗教者が一致して、その理念のもとで一つになっていく。

私どもの法華経の修行において、それを「実乗の一善」と言います。あらゆる人たちが一つの乗り物に乗る。その一つの乗り物は、世界を破壊していく三界火宅の炎の中から、あらゆる生きとし生けるものを一つとして、その渦中から救い上げるという、今まさにその時期に来ているのだと思います。世界の宗教者、まさに今こそ、その一つの真実の道に向けて目覚めて、全人類を導いていく時が、今日このウクライナ危機の渦中において問われていることだと思います。ありがとうございました。

てらさわ・じゅんせい
日本山妙法寺